

2016.11.28

相模原市の障害者施設殺傷事件は「学校教育に責任の一端がある」と受け止めている小学校教諭がいる。障害の有無や学力で子どもたちを選別する教育の在り方が、容疑者が障害者に抱いた差別意識の土壌になつていないと考えるからだ。グローバル人材の育成が叫ばれ、能力主義の傾向が教育現場で強まる中、「分けない教育」に目を向ける教員たちがいる。

■ 関心低く

「障害の有無によって子どもたちを振り分ける学校教育が、あの事件を引き起こした側面がある」ある大学教員が県内の公立小学校教諭らを前に訴えた。事件から1カ月後の8月下旬、県内で開かれた教育研究会でのことだ。大学教員は障害のある子もいない子も共に学ぶインクルーシブ教育が専門。「教育に関わる私たちの問題として考えていかななくてはならない」という問い掛けを県内の公立小学校教諭の本山真美さん(仮名、30代)は重く受け止めたが、周囲の反応は異なっていた。「教育にも責任があるなんて、言い過ぎ。大げさだよ」

普段から障害児教育について語り合う仲の男性教諭は、そつげなかつた。問題意識を共有できると思っていただけに、本山さんは二の句を継げなかつた。事件後、勤務校の職員会議でも話題に上ることはなかつた。

3カ月余りたった10月下旬には、障害児教育の研究会が県内で開かれた。相模原事件のことも取り上げられたが、議論は深まらなかつた。先の大学教員は発表会の最後の講評で教諭らの姿勢をただしていた。

時代の正体

障害者殺傷事件考

「分けない教育こそ」

(成田 洋樹)

「研究会の冒頭、黙とうがなかったのには違和感があった。事件は世界に発信され、サガミハラの名で呼ばれている。足元の神奈川で今後、どのような教育実践を行っていくべきか。よく考えてほしい」県内の公立小学校教諭の里崎絵里さん(仮名、30代)も、事件を機に教育の在り方をあらためて考えようという機運が学校現場で高まらない現状を憂える。背景として会議や保護者対応、授業の増加などによる多忙化を挙げ、教諭の意識の問題も指摘する。「新聞を読んでいない教諭が多く、社会への関心が低い。視野が狭くなっている」

■ 共に学ぶ

小学校には障害児らが在籍する特別支援学級があるが、里崎さんは障害児と健常児を分ける「分離教育」に疑問を感じている。勤務校では知的障害児も普通学級で学んでいたからだ。籍は特別支援学級にあつたが、同じ教室で毎日過ごしていた。ロッカーやげた箱も普通学級の子たちと一緒だった。

3年前に受け持った知的障害のある6年生の女子も、その一人だった。授業中は友だちのしぐさのまねをしながら、黒板に書かれた字をノートに記していった。漢字で名前が書かれた約30人のクラスメートのノートを一人一人に正確に配った。漢字の意味は理解できていなくても、字の形で覚えていくようだった。

1学年2、3クラス規模の学校で入学当初から共に過ごしてきた同級生も特別視せず接していた。清掃をサボっていれば怒ったり、給食のお代わりの分量を巡つ

てけんかをしたりすることもあった。そこには「自分たちとは違う子」「支援が必要な子」という視線を感じられなかった。

助け合う姿勢も自然と身に付いているようだった。家庭科の裁縫で「糸通し」が得意な女子は「玉止め」が苦手だった。別の子に玉止めをやってもらう代わりに、糸通しを引き受けることがあった。

里崎さんは、共に学ぶ意義について子どもたちから学んだことが多いという。「女子は周囲の子たちとの関わり合いの中で、さまざまなことを学んでいた。特別支援学級で1日の大半を過ごし、たまたま普通学級に来るような形だったら友だち関係を築けただろうか。いつも一緒にいたからこそ、女子もクラスメートも得られたことがたくさんあったと思う」

里崎さんは子どもたちの将来を見据えて、公立学校の在り方を説く。「障害児もやがて大人になり、生まれ育った地域で暮らすことになるかもしれない。そのときに、旧友やその家族、住民らが支えになることがあると思う。地域の子どもたちが通う公立学校こそ、障害の有無に関わらず一緒に学ぶことを大事にすべきだ」

■ 差別の芽

本山さんは2年前、異動先で最初に受け持ったのが5年生だった。クラスには4年生の後半から苦手な算数の授業だけ、個別指導を受ける男子がいた。教諭の間で「取り出し」と呼ばれている手法だ。

1学期のある日のことだった。本山さんが男子に声を掛けた。「次は若松先生(仮名)の授業だよ」

「え、何で。行きたくない」

クラスメートはみんな一緒に教室で学んでいるのに、一人だけ別の教諭と別室で過ごしていた。母親は「うちの子は算数がよくできない。同じ教室にいては、ほかの子に迷惑を掛けるのではないか」という不安を抱えていたという。

本山さんが新卒で着任した前任校は、特別支援学級に籍がある子も普通学級で学んでいた。障害のある子もいない子も同じ教室で学ぶことに違和感は無かつた。前年度の担任から引き継いだ「取り出し」だったが、「みんなと一緒にいい」という男子の意思を尊重して特別扱いをやめた。

学力は1、2年生程度。集中力が乏しく落ち着きもないが、周囲に溶け込む力がある子だった。算

数の授業になると、本山さんがノートの書き込んだ「九九」に取り組んだ。違う問題を解く友だちに「九九できたよ」とうれしそうに伝えると、「おまえすごいじゃん」と男子の頑張りを見て励ましてくれる子がいた。

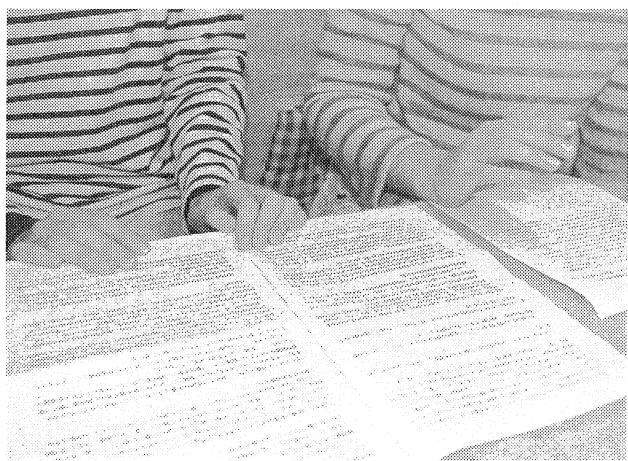
図工の授業で「大事にしているもの」を模写するという課題があった。男子はサッカーボールの模様を描けずに苦心していた。「これやって。どうやったらいいか分かんない」

「しよがないなあ。こうやって描くんだよ」

そばにいた子が洗々ながらも助け舟を出して、鉛筆で下書きをして手本を示した。「助けて」と言える関係が築かれていた。

学校現場では障害や学力に応じて支援が必要な子の「ニーズ」に合わせた教育を重視し、まずは個別指導で力を引き上げるべきだと考える方が根強い。だが、何かができる、できないという価値観で子どもたちを振り分けることが、子どもたちを傷つけていないか。子どもたちが振り分けられる流れが、本山さんと里崎さんはあの事件を胸に刻み、自戒を込めて語る。

「子どもたちを障害の有無や学力によって『分ける』ことはむしろ、差別や排除のまなざしを植え付けることになる。相模原事件の容疑者のような人が出てくる土壌を、学校教育が今もなおつくり出してはいないか。支援の名の下に子どもたちが振り分けられる流れが強まる中、同じ教室で共に学ぶ意義についてあらためて考えることが必要だ」



「障害の有無や学力で子どもを振り分けると、小学校教諭が話している」

◆特別支援学級 知的障害や自閉症、肢体不自由の児童生徒らを支援するため小中学校に設置された学級。県内公立学校の在学数は2016年度、小学校1万336人(全体の2.2%)、中学校4328人(同2.0%)で、5年前の小学校7620人(同1.6%)、中学校3366人(同1.6%)より増えている。より重度の子が通う国公立特別支援学校の県内51校の在学数は16年度、小学部2018人、中学部1448人。文部科学省が12年に行った調査によると、普通学級に在籍する児童生徒のうち、6.5%が発達障害の可能性があると推定されている。

書籍化のお知らせ

「時代の正体」シリーズの書籍化第3弾「ヘイトデモをとめた街—川崎・桜本の人びと」が刊行されました。ヘイトデモに対する闘いからヘイトスピーチ解消法成立

への歩みをたどりながら、「共生のまち」に暮らす住民の思いをつづり、差別の実相を問う。現代思潮新社から1600円(税別)で全国の書店で販売中。

Guest

株式会社イソダ 代表取締役 磯田 賢吾さん

11月28日の放送内容



ビジネス Up

鎌倉 老舗

「開発支援補助金」公募がスタート

の公募開始に伴い、本補助金の神奈川県地域事務局を担当する事に関する説明会を開催いたします。

● 100~3,000万円 ※事業内容により異なります。
7日(火)(当日消印有効)

補助金」公募説明会のご案内(参加無料)